初段三、二段二ッ三、三段二、四段先二、五段先、六段先先先先、七段上手、八段半名人、九段名人、碁所ト云、

〔半日閑話三〕一六俳園立路が隨筆寐覺硯の中に

碁の手直りは二目也、中手と云はなし、俗に五目は星目の中なれば五目を俗に云、

〔翁草百四十二〕碁に手直りと云事有り、世上の碁を嗜む人、それ〴〵碁家の門弟と成り、其藝募りて、上手へ對し三子著する位になれば、手直りの事を望む、上手碁を見て、位相應に手を直し遣す、是に六段有り、初段は三ッ、二段は二ッ三ッ、三段は二ッ、四段は先ッ二ッ、五段は先ッと半石ヅヽ上るなり、六段は畢竟上手と等しけれども、師弟の譯を以、三番の内、二番先ッを著シテ、一番上手より先ッを置、五段六段の弟子は世に希也、碁所は又上手に一石上也、三の碁は四ッ、二ッ三ッの碁は三ッ四ッと云格也、

〔視聽草六集九〕碁道珍話

手直上手江　三手合免狀

貴殿事、圍碁不淺執心、依之仲間一統遂吟味、今般對上手三手合免之畢、猶以不可有懈怠者也、仍免狀如件、

月日　　本因坊誰

誰殿

〔嬉遊笑覽四雜伎〕大家の人、この伎碁○圍に巧手なるは希なりと見ゆ、寛政中、雲州老公○不味初段になられしに、免狀の例なく、林門悅これを漢文に書たりとぞ、恭惟、閣下嘗以國務之暇、游衍群藝之場、好圍碁、頗得其妙、蓋以韜略盈虛之機、符於此技者歟、今茲寛政十二年辛酉新正、門悅與同職等謀、謹品第一級位最初矣、自今而後、對於上手、不過布置三碁子、閣下因是而進焉、則奇正相生、循環無端、至五級六級亦何以爲難也哉、林門悅再拜上、羽林次將備前州太守源老公閣下、と書けりとぞ、